
猫又のサクラ番外編【啓太と秋穂】

尾ノ坂 駿介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又のサクラ番外編【啓太と秋穂】

【Nコード】

N6743K

【作者名】

尾ノ坂 駿介

【あらすじ】

幼馴染は語る。あの日の思い出を、叶わぬ恋であることを知らずに。

（前書き）

番外編です。

猫又のサクラを先に一読する事を推奨いたします。

私の幼馴染、藤咲啓太。

幼稚園の頃から一緒に行動をしているお隣さん。

昔は色んな事で喧嘩したり、猫のようにじゃれあったりしたっけ。

まあ、今も似たようなものだけど。

でも、いつからだろう。私が彼に想いを寄せるようになったのは。今までの私たちの関係は幼馴染。いわゆる親友の位置にいた。

それから体つきが大きくなって、二人して中学に入ってから、気がつけば私は、いつも啓ちゃんの事を考えていた。今日は何を話そうだとか、何をして遊ぼうだとか。

これがいわゆる中学生特有の思春期なのかもしれない。一時的な発作みたいなものなのかもしれない。あの頃は本気でそう思っていた。だけれど、私のそういった複雑な感情が交差しあつて、絡み合つて、ついに事件は起きてしまった。

ああ。

やっぱり私は、知らないうちに彼の事を好きになっていたんだ。

啓ちゃんは知らない。

私しか知らない。

私しか知らない——あの出来事。

これは、中学三年生だった私と彼との間で、偶然に起きた《あの事故》までを綴る、ちよつとだけ淡い恋の昔話です。

啓ちゃん。

啓ちゃん。

大好きな、啓ちゃん。

- 啓太と秋穂 -

私こと大槻秋穂は、リビングの壁に掛けてあった日めくりカレンダーを凝視して脂汗を流していた。

暦は七月五日。夏も本格的に始動して間もない夏の日。脂汗を流しているのは決して暑いからだと言うわけじゃない。そう、決して。

「……どーしよー」

無意識に漏れた自分の情けない声が、さらに自分を不安へと駆り立てる。顔面蒼白とはいわないが、第三者の目から見ても私の顔は青ざめているだろう。

さて、この状況どうしよう。本当にこのままじゃ私、ヤバイです。カレンダーを無意味にペラペラ捲っている場合じゃないのに。時間は戻ってはくれないのに。

ちらりと時計を見る。今は朝の八時である事が直ぐに分かる。土曜日だというのに今日は早起きしてしまった。が、そんな事を問うている場合ではない。

今の私には時間がない。そう、全く時間がないんです。

「……ああんやバイよマズイよどうしよー」

頭を抱えて半分ベそかき状態の私の横を、ふっと誰かが横切る。それはショートカットに切り分けた栗色の髪をなびかせながら、薄い青柄のパジャマ姿で大きな欠伸を漏らす中一の妹——大槻雪奈だっ

た。

「ふわぁあ……お姉ちゃんおふぁよ……今日はやけに早起きらねえ……」

涙を溜めた瞳をこちらに向ける妹は、リビングの奥にある冷蔵庫までのそのそと向かうと、買い置きしてあった食パンと牛乳を取り出して、真ん中のテーブルにある椅子に座った。

食パンをレンジに入れると、雪奈は手前に用意したコップにとくとくと牛乳を注いで、口の中へ流し込む。口の周りに白いもの（決まていやらしいものではない）をつけて「ぷはー！ やっぱ朝はこれだねえ！」だとか親父臭い事を言っている。それから私の苦悩などガン無視と言わんばかりに、彼女は焼けた食パンを口に頬張りながら、ほくほくした様子で朝食を楽しんでいた。

私はいったん考えるのを止め、雪奈の前のテーブルに座る事にした。いちいち自分であれこれ考えていても仕方がない。もしかしたら、雪奈が何かアドバイスをくれるかもしれないし……。

「ねえ、雪奈」

食パンを食っていた彼女の手が止まる。

「んー、どしたのアキ姉？」

「雪奈って、泳ぐの上手だっけ？」

「……んー、上手いか下手かで言うと、下手。少なくとも、二十五メートル泳げるか怪しいくらい」

「そつかあ……」

たはは、とがつくり肩を落として笑う私に、不思議そうな様子で雪奈が訊ねてきた。

「どつたの？ いきなりそんなこと聞いて。……ははあ、さてはお姉ちゃん……」

「……うん。お姉ちゃん実はそうなんですよ、はい……」

「しかし困ったね。確か、一週間後くらいだけ、それ？ それまでに何とかしないといけないね」

「うん。でも、困ったなあ。まだまだ時間があるからって思ってたら、もう一週間後なんだよねー……」

「それはサボってたお姉ちゃんが悪いよ。自業自得ってやつ。今更悔やんでも、それは因果応報だと思うな」

ぐぬぬ。難しい言葉を知っておるなこの娘。正論すぎて返す言葉もありませんですはい。

ともかく。そう言って雪奈が話を続ける。

「アキ姉には時間がないんだよね。残り一週間で何とかしないと、アキ姉の身体は淫らな男教師の魔の手に……おお、きもいきもい」

「物騒な事言わないでよー！ その鬼教師が怖いから悩んでるんじゃないのさー！」

よからぬ妄想へ走り出した妹に涙目で突っ込みを入れる。いや、本

当にコイツ中学一年生なのかな？ 別方面の知識が豊富すぎるよ。

「……ハア。もう、どうしてこうアキ姉は面倒くさいことは最後に残しとくかねえ。最後は自分に返ってくるのに」

「う……うう。そんなわけで打開策とかない？」

「打開策ねえ……水泳が得意な人に教えてもらうのが一番だと思うけど……あ、そうだ。藤咲さんがいるじゃん！ ほら、お隣の！ あの人、夏の県大会で一番だったって新聞に載ってたじゃん！」

「……あ」

そういえば。すっかり忘れていた。

私の直ぐ近くに……っていうか幼馴染に、藤咲啓太って偉大なるスイマーがいたじゃん。

これは盲点だった。近すぎてすっかり見逃していましたよ。うっかり秋兵ですか、アハハ。

「ありや……その様子だと藤咲さんの事すっかり忘れてたみたいだね。ああ、可哀想に。お姉ちゃん、幼馴染の事何にも知らないんだね。それじゃいつまで経っても進展しないよ？」

「わ、私と啓ちゃんはそういう関係じゃないよ！ ただの幼馴染だつて！」

「ふうん？ ただの幼馴染、ねえ……。いつまで自分の気持ちに偽り続けるのかな？ 最終的に後悔するのはお姉ちゃんなんだよー？ ほらほら、自分に素直になりなつて」

「う、うるさいな！ 雪奈にはそんな事関係ないよ！」

柄にもなく顔を真っ赤に染めているのを隠しながら言うのは説得力がなかったらしい。嫌らしい笑いを含みながら雪奈は「はいはい。それじゃ自由にどうぞ」とだけ言って、今まで自分が使っていた皿とコップを流し台に置いて一洗いすると、着替えをするために自室へと向かった。

が、途中で

「あ、するんだったら早めにしておいた方がよいよ。善は急げって言うし。ただでさえお姉ちゃんの後悔ばっかしてんだからさ。計画は早めに練っておいた方が吉だと雪奈は思いますよ」

「……うん、そうだね」

「それじゃ頑張りなよ、アキ姉」

ひらひらと手を振って自室へと戻っていった。色々からかわれた感はあるものの、相談にはちゃんと乗ってくれた事には感謝した。

……さて。こうなればするべき事は唯一つ。雪奈もああ言っていた事だし、さっそく連絡を入れてみるか。

私はポケットの中にある携帯を取り出すと、アドレス帳から《藤咲啓太》と書かれた電話番号を押して、彼からの応答を待った。

右手には自転車の鍵。左手には水着のバッグを掲げて。

外は快晴天気は上々。気温がもう少し低ければ言う事はなかったんだけど。

今、私は桜ヶ丘市民プールを目指して自転車で移動中。もう直ぐ見えてくるんだけど、いかんせん今日は人が多くて通りが混雑している。

大きな《桜ヶ丘市民プール》という看板の目前まで行くと、そこには不安そうにキョロキョロと見回す男の子の姿があった。そう、あれはまさしく――。

「おい。啓ちゃん。お待ちせー」

私の声に気づくや否や、啓ちゃんはバツ！ とこつちを向いて光の速さでこつちまで走ってきた。思わず「こつちくん」って言いなくなった。

「あ、秋穂！？ 無事か！？」

「おー啓ちゃん。どうしたのさそんなに慌ててー」

「どうしたもこうしたも！ お前がいきなり《啓ちゃん助けて！ 理由は無いけれどマッハで危険状態なの！ たとえるなら二次元と三次元が合体したくらい危険なの！ だから市民プール前に水着持って八時三十分くらいに来て！》っていうから慌てて来たんじゃないか！ 忘れたのか！？」

……………。

ああ、あれか。うん、まさか信じるとは思わなかった。

「あー、ごめん。それ嘘。危険ではあるけど大半は嘘だよ」

「嘘おおお！？ ……はあ、なら普通に呼び出してくれよ……。おかげで朝飯食ってねえんだぞ俺は……」

大きく肩を落として落ち込む素振りを見せる啓ちゃん。顔は地面を向いていて見ることは出来なかったが、プールの塩素で力チ力チになっっているはずだろう髪はやけにサラサラとしていた。まるで女性のような綺麗な黒髪で、その女性である私が少し嫉妬してしまうほどだ。

そんな啓ちゃんに向けて、さも当然のようにケラケラと笑う私。

「ギャグだつて事くらい、フツーに考えたら分かるでしょ啓ちゃん」

「……あのなあ、俺は練習疲れて今まで寝てたんだぞ。寝ぼけ状態だぞ？ そんな状態で意味不明なSOS信号出されたら慌てて行くしかないだろ？」

「おや、女の子のピンチには大急ぎで駆けつけるってヤツかい？ さすが啓ちゃんは格が違った」

「それほどでもない。……ってそうじゃない！ も、もういいよ。冗談なら帰るからさ……」

「あーストップストップ！ 危険なのは本当だから帰っちゃ駄目！ ちょっと啓ちゃんにお願いしたいことがあるんだよ！」

自転車の置いてある駐輪場まで寂しそうにトボトボと歩いていく啓ちゃんを大急ぎで引き止める。

危ない危ない。啓ちゃんをからかってたら本題を忘れてたよ。

「俺に、お願いしたいこと？」

不思議そうに首を傾げる啓ちゃん。その顔には少しばかり嫌悪の表情も混じっていた。

「何さその顔はー？ 確かに啓ちゃんにとっちゃ面倒かもしれないけどさ、お昼くらいはおこるよ？」

「……マジで？ 昼飯おごってくれんの？」

お、食いついた。あの目は食べものに飢えた人の目だね。

「うん、おごってあげるからさ……とりあえず中に入る？ ここに居ても暑いから。ここで待っててね。私自転車を置いてくるから」

「お、おう」

それだけ言っただけで私は彼を尻目に自転車をこいで駐輪場まで。

さて、時間は限られている。後は啓ちゃんの教え方次第ってヤツだね……。

……教えてもらおう自分が言っべき台詞ではないんだけど。

見て分かるように、私は水泳が苦手だ。私の弱点だと言って良いほどに、水泳は大の苦手なのである。

学校や巷では「博学でスポーツ万能の秋穂さん」とか騒がれているらしいけど、私は別にそんなのじゃない。

人間は努力すれば大抵の事は何だって出来る。むしろ、他人が出来る事を、自分が出来ないはずがない。そう思っていた。

けど、そんな私は今までの人生の中で泳ぐという機会もなければ、それを自ら試そうなどという機会もなかった。

だから、実質は水泳というものから無意識に逃げていたのかもしれない。自分の唯一の不得意であると感じてしまう前に、目の前の壁から背を向けてしまっていたんだ。

そんな私が努力云々の話を語る資格はない。語る事など許されるはずがない。

そうだ、雪奈の言うとおり、いつも私は面倒な事から逃げていたのだ。

逃げて、逃げて、後悔する。最終的には後悔する。それは今の状況にも繋がり、あるうことが幼馴染にも迷惑をかけてしまっている。私は一体、どこまで自分の事で他人を巻き込めば気が済むのだろうか。

どこまで、そして……いつまで。

「……はあ」

目の前にあるロッカーに衣類を投げ入れ、私は持ってきた水着にこそいと着替える。学校で購入したスクール水着だ。黒というよりどちらかといえば藍に近い。

そっぴや着替えていて分かったんだけど、どうも胸のあたりが苦しい。布切れに締め付けられるような、押さえつけられるような感じがして、気持ちが悪い。

はて、私は買うときにサイズを間違えたのかな？ お母さんと相談してちゃんと決めたはずだけれど。

水着からはみ出そうな胸を無理やり押し込んで着替え、私は更衣室を出てシャワーを浴びると、そのままプールへと向かった。

さて、と。今さらウジウジ考えたって仕方がない。ともかく今は今やるべき事を集中しよう。せっかく啓ちゃんが教えてくれるんだ。

県の水泳選手が教えてくれるんだ。
だからせめて、彼の期待に応えられるように頑張ろう。

プールは屋内の二十五メートルプールで、見物用の観客席がプールを囲むように二階へ設置してある。

この桜ヶ丘市民プールはゴミ焼却所に隣しており、その余熱で温水を利用している。そのために温泉施設とプール施設とを併用して営業している。

また運動器具の設備も充実しており、二階は観客席を設置している以外にも、トレーニングルーム（いわゆるジム）などを設けている。プールで元気に泳いだり、二階のジムで運動した後は、温泉で疲れを取りながらリラックス……うーん、いいねえ。泳ぎ疲れたら啓ちゃん誘って温泉に行こうかな？

ん、いや待って。もし混浴だったらどうしよう。いやいや市民プールでそれは有りえないと思うけど、水着OKだったら一緒にお風呂とか入れるんじゃない？……？

外国でも水着でお風呂に入るところもあるんだし、も、もしかしてもしかすると、啓ちゃんと一緒にお風呂に……！？

「……なあ、秋穂。顔が赤いけど、どした？ 熱でもあるのか？」

「へっ？ ……ふえっ！？」

いつの間に妄想に耽っていたんだろう。啓ちゃんが私の顔を心配そうに覗き込んでいた。

あわわわ、啓ちゃん近いよ近いよー！ 後もう少ししたら吐息が当たるくらい近いじゃないのさー！

そうだった。今はもう水着に着替えて、いざ練習開始つてところだったんだ。

それなのに私ときたら温泉がどうのこうのとか考えてて……ああもう破廉恥な！

「だっただだ大丈夫大丈夫！ 全然熱とかないから心配しないで！ ほっほら早くプールに入る！ 折角来たんだし」

半ば強引に啓ちゃんの腕をとって水の中に連れ込もうとした——のだけれど、啓ちゃんに「入る前にちゃんと準備体操しろ」と怒られて、落ち着かない身振り素振りのままプールサイドで準備体操。色々と啓ちゃんにレクチャーを受けて、次から水の中でレッスンを受けるんだけど……。

このままで大丈夫かなあ……。

準備体操も終えて、メッシュキャップも被つていざプールへ入水。冷たい水が身体を覆っていくのかと思つていたけど、それほど冷たくはなく、むしろちょうど良い水温だった。

それにしても……やはり水泳をしているから、啓ちゃんは筋肉が凄い。どこが凄いのかつて言うと、やはり肩幅と胸筋かな。

無駄な贅肉一つなく、かといってボディビルダーのようにムキムキなワケでもない。スラリと細長い身体に綺麗な筋肉が付いて……美筋肉つていうのかな？ わかんない。

あんまり私とその美筋肉を凝視しているもんだから、何見てんだよ、と啓ちゃんから不審がられてしまった。見ているものは筋肉です、はい。

「ちょっと離れるからさ、俺のところまで泳いでみなよ」

「う、うん！ それくらい全然大丈夫だよ！」

啓ちゃんは私から二、三メートル程度離れると、手を振ってこっちに合図を送ってきた。そこまで泳いで来いとのことらしい。

……しまった。そういえば啓ちゃんに“泳いだ事がない”って事を言っただけだった。一番代表的なものはクロールといていたが、私はそれすらもしたことがない。

かといって今更泳いだ事がないなんて言うのも恥ずかしいし、もしかしたらぶっつけ本番で泳げるかも分からない。確率は雲を掴むくらい低いと思うけど、IFを考えたら……。

そして、私は勢いよく水面から水中へ潜ると、力任せに手を振り回して水を掴んで前に進もうとした。

必死で水を押ししたりバタ足をしているものの、身体はどんどん水の中へと沈んでいく。ていうか呼吸の仕方がわからない。いつすればいいんだろう。

「（……おーい秋穂ー。沈んでる、沈んでるぞー）」

いつの間にか近くまで寄って来た啓ちゃんの声が水面から聞こえてくる。い、言われなくてもわかってるよ、そんなこと！

そして身体は上手い具合にプールの底（150センチメートルだからそれほど深いわけではない）に沈んだ。他者からは溺れてしまっただけではないのかという様子にさえも見えてしまうほど、私のそれは泳いでいる様子とはかけ離れていた。そしてその隣には、何やらプールの底に肘を立てて、寝そべったままの姿勢でこちらを見ている啓ちゃんの姿があった。その少し困ったような表情から容易に次の言葉が私の頭の中で連想された。

『……泳げなかったの？』

……はい、そうです。実は泳げないんです。

恥ずかしさと後悔が臨界点を突破した私はまともに啓ちゃんの顔を見ることが出来なかった。

ああ、うう。もう駄目だ。啓ちゃんに呆れられる。あんだけ自信満々に言っていてこの体たらくとは情けない。

そもそもやったことないのにいきなりやろうつて考えが甘いのです。調子に乗った結果がこれです。ごめんなさいです。

「……やれやれ。泳げないんだったら始めから言えよ。泳げると思っ
て指示したんだからさ」

「けほっ……う、うう……ごめんなさい……」

「とにかく。まずは泳ぎ方からマスターしないと。自由形……ク
ロールから教えてやるよ。ほら、俺の動きを真似してみて」

私の目の前に寄ってきて、ゆっくりと水をかく。啓ちゃんはその場で立ったまま、水面にある左手をお腹に入れてそのまま外に出すと、外に出した左手を大きく、だけどまっすぐに元あった場所まで持ってきた。もう片方の手も同じ動作だった。私もそれを見よう見まね
でやってみるが、あまり上手はいかない。何だか、凄くきこちな
い。

「……えっと、こうかな？」

「あー、違う違う。そうじゃなくてさ、掌で水を外に押し出すよう

にすればいいよ。ああ、指の間隔は閉じるんじゃないって少し空けるくらいがいい。そうすりゃスムーズに泳げるようになるから」

啓ちゃんの言われたとおり、指の間隔を少し空けて手をお腹辺りに入れて外へ押し出し、元の位置まで戻す。

すると、さっきまであったぎこちない感じはあまりしなくなった。ほんとだ、何だか水をかきやすくなった。

「そうそう、上手い上手い。それじゃ次は実際に泳いでみようか」

「うん、そうだね——って、ええ！？　ちょ、ちょっとまだ早すぎない！？　もっと何回か練習した方がいいよ！」

「大丈夫だよ、俺が足を持ってやるから。呼吸の仕方も練習しておいた方がいいしな。……それとも、まだ怖いかな？」

心配そうに見詰める啓ちゃんだけど、それに私は少しカチンときた。いくらなんでも泳げない幼稚園児じゃあるまいし、怖いと言われてはいそうですねと引き下がる大槻秋穂さんでもない。

「こ、怖くなんてないよ！　これくらいへっちゃらだよ！　失礼だね啓ちゃんは！」

「お。そ、そうか。分かった。それじゃ早速泳いでみようか」

苦笑いを若干浮かべつつ首を傾げている啓ちゃんを見て、即座に私は先ほどの発言を後悔した。

ああ、何でわざわざ教えてもらっているのに逆ギレしてんのさ私は——！！

……もう、何か今日はカルシウムが足りないのかもしれない、うう。

私は今、水の上にうつ伏せになって浮かんでいる。後ろから足を持つてもらっているの、さっきみたいに沈む事はない。

顔はつけていないので呼吸は普通に出来るが、それにしても首が痛い。顔を無理やり上げているのでさっきからずっとこの体勢なのだ。

「ほら、それじゃさっきのように手で水を押してみて」

啓ちゃんの声が後ろから聞こえる。それに従うように私は手を水中でかく。

すると、ぐいつと体が前に行くような錯覚——いや、錯覚じゃない。実際に前に進んだんだ。けど、啓ちゃんが足を持っているので前には進まなかった。

「呼吸をするときは手を押し出すのと同時にやるんだ。で、前に戻すときに顔を水につける。呼吸はその繰り返しだ。簡単だろ？」

言われたとおり、私は押し出すタイミングを狙って真横に呼吸をした。なるほど、と思いながら元の位置へ戻す時に顔は水面へ。

なんだ、簡単じゃん。難しいと思っていただけ、そうでもないや。

何度も同じ動作を繰り返していると、ふっと啓ちゃんが私の足を離した。

次の動作に移る前に離されたもんだから、あやうく沈みかけた。

「ぶはっ……離すときは離すって言ってよ、危ないな！」

「悪い悪い。でも、さすが上達が早いな。運動神経が良いだけのことはあるから飲み込みが早い」

まさか啓ちゃんに褒めてもらえるとは思ってなかったの、ちょっと嬉しかった。

でも同時に恥ずかしさも込み上げてくるわけで、素直にありがとうとは言えず、悪戯っぽい憎まれ口を叩くしかなかった。

「へへん。この私を誰だと思っていのさ？ 万能超人秋穂さんだよ！ 出来ない事などあんまりない！」

「うんうん。つまり一通りは出来るってやつか。言い方がややこしいわ！ ……ん？」

何かに気がついた啓ちゃんが私の傍まで泳いでくる。そして私の目の前に立つと、ゆっくりと顔を近づけて――。

……ふえっ？

「……ほら、水泳帽がズレてる。ちょっと動くな」

啓ちゃんの手が、中心より若干ズレている水泳帽に触れる。そのまま丁寧な手つきで真ん中に寄せていくんだけど……。

ふえええっ、啓ちゃんの顔が間近でっ、しかも息が顔にあたってるよー！？

緊張で身体が強張り、心臓が素早く鼓動すると同時に、顔が活火山の噴火を彷彿させるかのように真っ赤に染まっていくのがわかる。

啓ちゃんは全く意識してないみたいだけど、私には無理だよこんなー！

なるべく啓ちゃんを直視せずに視界を背けていたけれど、真っ赤になった顔は流石に啓ちゃんに隠しきれなかったのか、怪訝そうな表情で聞いてきた。

「……ん。秋穂、顔が赤えぞ。まさか熱でもあんのか？」

そつと啓ちゃんの大きな手が額に触れる。

けど、啓ちゃんは手だけでは熱があるのかどうかを判断できなかったらしく、「ああ、間怠つこしい」と言うような顔で私の額に自分の額を――。

……って、え？

「んー、熱は無いっぽいなー」

啓ちゃんは、熱を確かめる時は瞳を閉じてする。そういえば幼稚園児くらいの時、同じように啓ちゃんがしてきた事があったっけ――。

……。
……。

「……え？ ちょ、わっ！ どんどん熱くなってんぞ、秋穂！？」

……。
……。
……はうう。

「……はうう」

頭がくらくらしして何も考えられない。視界も安定せずにくらぐら動き続けている。

目の前には啓ちゃんの顔が。こんなにも、こんなにも私の近くにある。

もう、無理……身体が……熱くて……倒れ……。

「あつううう……」

ふつ、と力が抜け、その場でゴボゴボと身体が沈んでいくのが分かった。

あれ、こんな事で人間って意識を失うんだっけ？それなら秋穂さん、また一つ詳しくなっちゃったなー、アハハ、アハハ……ハ……。

「今日のお前、どっかおかしいな」

時刻は正午。あれから私たち二人はプールから上がり、近くのファーストフード店で昼食をとっていた。「マックとナルト」という、いかにも怪しそうなラーメン屋だったが。

それにしても啓ちゃんの一言と視線が痛い。何か、本当に病氣の人のように見られているような気がする。

「おかしくなんてないよー。ちょっとプールでのぼせただけじゃん」

「水温30度のプールでのぼせるお前は普通に風呂は入れんのかよ、たく。運動神経はいいのに変なところで体調崩す奴だな」

「うるさいなー。私の身体って結構繊細なんだよ？いくらやっても啓ちゃん無しじゃ沈んじゃうし」

「……そりゃ、単に胸が大きいからじゃねーの？」

「え、何か言った？」

「い、いやなんでもねえよ。気にするな」

そつぱを向く啓ちゃんの顔は見えない。はて、もしかして悪口だろうか。だったら問いただす必要がありますな。

「何だよー。気になるじゃない。何て言ったのー？」

「だから何でもねえって。手が進まねえんなら秋穂のラーメン食っちまうぞ？」

私のラーメンに手を伸ばしてきた啓ちゃんの手を華麗に払いのけ、狙われていたそれをずるずるとする。

うん、美味い。怪しい店名から怪しそうなラーメンを出されてしまうのではと思ってたけど、そうでもなかった。普通に美味しい。汁のダシが濃くていいね。これで店主の顔が濃くなければ、もっと食欲が出てただけけど。

「……ま、飯食ったら少し休んで、もう一度プールに戻るか。このカードがあれば今日一日は出入り自由だし」

財布からピツ、と紙のカードを抜き出し、私にそれを見せてくる。利用ご優待券……なるほど、こんなものがあるとは。

一回しか使えないのに啓ちゃんは太っ腹だね。実際はガチガチの腹筋だけど。

お昼が終わった後、少しばかりの休憩をプールの休憩所で過ごす。外のベンチでゆっくりしようかなと思っていただけ、何やら外は天気が悪い。雨が降りそうな天気だ。

ああ、そういえば今日は天気予報が、午後から雨が降るだとか言っ

てたような。しかも雷注意報も出てたし。……雷か。うっ、嫌だなあ。

因みに隣に座っている啓ちゃんは、満腹なのか、満足げな表情で口元を緩ませていた。ほんと、分かりやすいね。

「なあ」

「ん、どしたの？」

「どうしてさ。今になって水泳を始めだしたんだ？」

「……あ、あはは。ちょっとね。いつまでも苦手なものをほったらかしにしちゃ駄目かなと思ってて」

「そつか。秋穂はすごいな。俺だったら絶賛放置で次のステップ進むぞ」

あはは、と私に笑いかけてくる啓ちゃん。

すごくなんかない。そう言いたかったけれど、啓ちゃんの事だから「謙遜すんなよ」の一言で返されちゃうんだろうな。

だから黙っておいた。本当はすごくなんかない。ただ、必要最低限の事を、しなければならぬ事をするだけの話だから。

啓ちゃんは椅子から腰を上げると、私の背中を軽く叩いて前に促した。

「よつと。それじゃ、そろそろ水着も乾いたことだし、着替えて練習しようぜ。もう秋穂なら泳げるようになるよ」

笑顔を向ける啓ちゃんの言葉には説得力があった。何せ県一番の水泳選手なのだから。

そして……私の大切な幼馴染でもあったから。

目標は二十五メートル。ちょうど啓ちゃんがいるところまで。

大丈夫だ。落ち着け。もし何かあったとしても、きっと啓ちゃんが助けてくれる。もし溺れても、きっと啓ちゃんが助け——ん？

まさかその場合は、助けてくれた啓ちゃんが私に人工呼吸をするって事なのかな。もしかすると。

……………。

ひゃあああああっ！？

ちよつと、そんな！ だとしたらいきなり過ぎるよ！ 溺れた時は意識ないんだから、心の準備とか出来ないじゃん！

って違う違う！ 私は何で溺れることを前提に考えてるんだ！ 助けてくれる啓ちゃんに失礼じゃない！

「……おい、秋穂！。緊張するんだったら、もう少し練習してからでもいいんだぜー？」

少し離れたところから聞こえる啓ちゃんの声でハッとした。

「だっただだ大丈夫！ じゃ、じゃあ行くよー！」

ゴーグルを装着して、私は思い切り水の中へ飛び込む。なんというか、その感覚はさつきとは違う、妙な心地よさを感じた。

啓ちゃんの言われたとおりに手で水をかき、バタ足で水を押し出していく。

するとどうだろうか。さつきまで全然前に進まず沈んでいた身体が、ぐいぐいと前へと進んでいく。

手で水をかく途中も息継ぎは忘れない。左で水をかいたら呼吸は右

で、右で水をかいたら今度は左で呼吸と、リズムよく繰り返していく。

……しかし、意識していたら結構疲れる。まだまだ動きがぎこちない上に、上手く手から入水が出来ていないので、泳ぐたびに疲労が溜まっていく。

……いや、もう頑張るしかない。もう啓ちゃんの顔は見えているんだ。あと残り十メートル……九……八……。

呼吸が荒くなり、乳酸が溜まってきているのか、手足も疲れて動かなくなってきた。だけど、もう、あの壁をタッチすれば終わり。課題をクリアする事が出来るんだ。

後残り三……二……一……これで、ラスト……！

——そして、私の指が壁に触れた。二十五メートル。たどり着いたのだ。今日一日練習するだけで、目標を達成できたのだ。

「っぷ……ふああ！ ……啓ちゃん、やったよ！ ここまで辿りついた——きやつ！？」

その場で直立させた私の身体に、妙な圧迫感が襲った。締め付けられるというか、実際に締め付けられているんだと言うか。

……えっと、ちょっと待って。これって、啓ちゃんに、啓ちゃんに……？

抱きしめられているんだよね……！？

「いいよっしやあー！ 頑張ったな秋穂！ まさか一日でここまで泳げるとは……感動した！ 前向きにがんばる秋穂の姿勢に感動したっ——！」

耳元で聞こえる啓ちゃんの声。微かに当たる彼の吐息に、ぞくりと

した妙な感覚が背中を走っていく。

ぎゅっと抱きしめるその力は強いけれど。温かくて、大きくて。それでいて心強くて。何だか緊張よりも、この嬉しさを分かち合いたって思いの方が、今では勝っている。

相変わらず心臓はとてつもないくらいドキドキ言っていたんだけど、それももう、何だかどうでもよくなってきた。ちやっ。

泳ぎきった事の方が嬉しかったし、こうしていると何故か安心するから。

私も同様に、彼の背中に自分の手を回そうとして——止めた。周りにいる人たちの、凄まじいほどの痛い視線を感じ取ったからだ。

また別の感覚が私を襲った。今度は何なのかわかる。寒気だ。若いアベックの二人から、子連れの母子などの視線が突き刺すようにこちらに向いている。

あわわわ、お母さん子供の目を塞いじゃったよ。何か小声で「見ちゃいけません！」とか言ってるしー！

「け、啓ちゃん！ ちょっと、ヤバイって！ 気持ちわかるけど、その、周囲の視線が……！」

「……あ」

自分のしていた行為に気がついたのか、啓ちゃんは即座に顔を真っ赤っ赤に染めて私を見る。つられて私も同じように真っ赤になってしまった。

って真っ赤にするのはちょっと嬉しかったり——じゃなくて！ 恥ずかしいから離してよー！

と、そろそろ限界を迎えていた私の身体から、すっと彼の身体が離れていく。

「ごっつ、ごめん秋穂！ つい嬉しくなつて……でも、おめでとう！
これで秋穂はもうカナヅチじゃないな！」

ぼん、と軽く啓ちゃんが私の肩を叩いてくる。……本当に、人の気も知らないで気楽な人だよな。

でも、素直に嬉しかった。ここまで泳いでこれたのが。諦めずに最後まで泳ぐ事が出来たのが。

そして、ずっと真剣に教えてくれた啓ちゃんが、ここまで私の事を思つて付き合つてくれたのが、本当に嬉しかった。

これで心配事はなくなった。体育の時間でも普通に泳げるようになった。

思い切つて、啓ちゃんに教えてもらつてよかった。今じゃ心からそう思っている。

休憩室から見える外は、ざあざあ降りの雨と風が地上を支配していた。

天気予報は的中していたのか、夕方だというのに空は既に真っ黒な世界へと転じていた。

うーん、今日は傘やカップもってきてないんだよね。途中のコンビニで買おうかな。

「……マジで！？ それじゃ今日俺——ええっ！？ じゃあ姉さんは——そんなのか、友達と……わかった。じゃあ今日は適当なものでも食べてるよ。はい、はい……」

何やら隣では啓ちゃんが切羽詰った様子で電話している。
はて、緊急事態か何かがあったのかな。

「どしたの啓ちゃん？ 何かあったの？」

「ああ……今日な。父さんと母さんが急に家に帰れなくなっただけ。姉貴がいるから食べ物の心配はないだろうと思っただけ、その姉貴も友達の家泊まるんだってさ。やれやれ……今日は俺一人だよ。飯も適当に作るしかねえなあ……」

肩を落として落胆する啓ちゃん。そういえば啓ちゃんは料理が苦手だったんだっけ。家庭科の授業でも毎回先生に怒られていたのを思い出した。

……。そう言えば、今日はうちの親も帰ってくるの遅かったっけ。でも、まあ雪奈も結構料理の腕が立つから……大丈夫だよな。うん、じゃあ、折角今日一日丁寧に教えてもらったんだし、恩返しをやりまうかな。

「あ、それじゃあさ。私が啓ちゃんの家に行って料理作ってあげよっか？ これでも私、意外と料理得意なんだぜー？」

「……え、マジで？ 本当にいいの？」

「どうせ啓ちゃん、コンビニでも寄ってお弁当買う気でしょ？ 今日のお礼も兼ねて、特別に秋穂さま直々のフルコースを作っちゃうよ。もちろん無償でね」

ぶい、っと人差し指と中指を上げてピース。フルコースとは言っても、生姜焼きや簡単な野菜サラダくらいしか作れないんだけどね。んで、それを聞いて、啓ちゃんの黒い瞳から、だーっと涙が溢れた——って、泣くほど嬉しいもんなの！？ いや、まあ、そりゃ喜んでくれるのは私としても嬉しいんだけど。

「ありがと……ホンマに秋穂ありがと……俺、秋穂が幼馴染で本当に良かった。もうお前愛してるよ」

……へ？

今、啓ちゃん最後に何て……？

……。

……。

……ッ！？

ぼふっ！！ と湯気の出る音が私の頭から聞こえた。鏡で見たら、おそらく首から上が真っ赤になっているだろう。な、なんでなんで啓ちゃんはそうやって私を惑わす事ばかり言うのかな本当にー！

「じよ、じよじよ冗談でもそういうことは言わない方がいいんだよ！ 誤解しちゃうからさ！」

「ん、もしかして誤解したのか？」

「いや、そ、そうじゃなくてー！ もう、いいから帰ろ！ 雨が強くなる前に！」

半ば強引に啓ちゃんの手をとって、私は引つ張るように彼を休憩室から連れ出した。

……雷がゴロゴロと鳴る前に、無事に帰れたらいいな。

啓ちゃんの家キッチンはずちの家より広くて扱いやすいところだった。色々充実とした設備も備わっており、分かりやすい位置に包丁やら調理器具などが置いてあった。

さて、冷蔵庫の中を失礼すると、中にはちょうどよく豚肉がパックで保存してあった。夕飯はこれを使わせてもらおうかな。早速得意な豚のしょうが焼きを作ろう。

後は海鮮サラダを作るために、わかめやレタス、ブロック状に切ったカツオやマグロなんかも自宅から用意してきた。水切りで野菜にシャキシャキ感を出すのも大事なんだよね。

今日の夕飯はこれで充分かな。多分啓ちゃん結構食べるから、普通より多めに作っておいた方がいいかもね。

それから小三十分ほど経って、しょうが焼きと海鮮サラダが出来た。うん、見た目はしょうが焼きが少しコゲてるけど、味は全く問題ない。

むしろこのコゲ具合を狙って——ごめんなさい嘘です。普通にコゲて失敗しました。でも味見したけどどうってことなかった！ だから大丈夫！……多分。

「啓ちゃん！ 御飯できたよー！」

私は洗濯機の中でぐるぐると回っている洗濯物をじーっと見詰めている啓ちゃんに呼びかけた。あ、仕事が欲しいっていったので洗濯を任せました。

「お、出来たか！ いやー、お腹空いたぜー」

駆け足でこちらへ向かってくる足音を聞き、私はすぐに食べられる

ようにグラスとお椀、それから箸をテーブルに用意しておいた。とくとくとグラスにお茶を注ぎ、お椀に山盛りの御飯を注いだところで、啓ちゃんの姿が見えた。わあ、ナイスタイミングだね。

「さささ。冷めないうちに秋穂さま特製の料理をどうぞ！」

「豚のしょうが焼きか。いやあ、上手そうだな。見た目の綺麗だし、俺の作った料理とは大違いだ」

「へっへー。味も保証するよ？ なんとってこの才色兼備な秋穂ちゃんが作ったんだからね！ ほら、食べて食べて！」

急かすように啓ちゃんを促す。啓ちゃんは何度か頷いて、箸でしょうが焼きを掴むと、口の中へ放り投げた。

ゆつくりと味を噛み締めているだろう。口をもごごと動かして飲み込み、数秒した後啓ちゃんは、

「……美味い。めっちゃ美味い。あかん、また涙出てきた。俺もう死んでもいいや」

だーっ、と涙を流しました。今日は何か良く泣くね。全部うれし泣きなのだからいいけど。

「そんな大げさなー。でも、そう言ってもらえると嬉しいな。作った甲斐があつたよ」

頬を掌で覆って両肘を立て、美味しそうに私の作った料理を食べる啓ちゃんに笑顔を向ける。

本当、こんな風に食べてもらえるんだったら、毎日作っちゃってもいいかもね。ちょっと朝が早くなっちゃうけど。

……毎日、か。毎日……。

「……あのさ、啓ちゃん」

「ん、どした秋穂？」

啓ちゃんが私に視線を向ける。大きくなった頬には何が入ってるんだろう。指で突付いたら啓ちゃん怒るだろうな——ってそうじゃなくで。

ちよつと目つき悪いけど、真っ直ぐで澄んだ瞳はじつと私を覗き込んでいる。少しだけはねてボサボサの頭と、大きな身体つきは今でも成長している。まだまだ大きくなるのが凄い。

大きく深呼吸して言葉を整理する。逃げちゃ駄目。言いたい事はちゃんとと言わないと絶対に後悔するから、多分今しか言う機会はないと思うから。

二度、三度、息を吸って、そのまま私はそこにあった割り箸を持つと、しょうが焼きを一切れ掴んだ。そして——。

「ほ、ほらっ！ 啓ちゃん！ あーん！」

……やっぱり逃げちゃった。ああ、もう！ 臆病者！ 意気地なし！

……っていつか今の状況の方がよっぽど恥ずかしくない！？ 何やってんのよ私、本気でアホか！

うう、何で「毎日お弁当作ってあげるよ」ってくらい、素直に言えないんだろう。別にそれほど大したことじゃないのに。

「お、おおっ……あ、あーん」

啓ちゃんは少し恥ずかしそうにしながら、私が掴んだしょうが焼きを口の中へ運んだ。箸が彼の口に触れ合うのと同時に、ドキンと胸

が高鳴った。

何だろう、何かこれ凄いドキドキする。ただ彼の口の中へ運ぶだけなのに、心臓がやたらとうるさく鼓動し始めてしょうがない。

「なんか、恥ずかしいなコレ」

啓ちゃんも同じ気分だったんだろう。ちょっとだけ赤らめた頬が良くわかって、私もつられて赤くなる。

気まずいムードが続く。それから終始無言でいたけれど、外から聞こえてくる雨の音に耳を傾けながら、私は言った。

「雨、強くなってきたね」

「……そうだな。夜から雷注意報も出てたから、もしかすると」

「うう、雷いやだなあ……」

「なんだ秋穂、雷嫌いなのか？」

「好きなはずないじゃん。雷も嫌いだし、暗いのも嫌い。あの一瞬ピカッて光ってゴロゴロー！ってする音が大嫌いな。子どもの頃から」

「そっか。俺もあんまり好きじゃないな、雷。……ご馳走様！美味しかったぜ！」

ふとテーブルを見ると、そこはカカリと平らげた跡の食器があった。まさか全部平らげるとは……啓ちゃん恐るべし。

でも、嬉しいな。残さず完食してくれて。作った甲斐があったよ。

片付けた食器を水洗いして、洗剤であわあわとなったスポンジを使って一枚一枚綺麗に磨いていく。

隣で啓ちゃんもいる。料理のお礼だといって、同じように手伝ってくれているのだ。

そんな気をきかさなくてもいいのに、と言ってはみたけれど、頑固な啓ちゃんは「任せとけ!」と言ってきかない。

お皿を割らないようにね、と言って、私は作業に戻った。ちょっとだけ真剣な顔の啓ちゃんにクスリと笑みが漏れた。

さて、残り三枚、二枚、一枚——ときたところで、つい気を緩めてしまった。つるりと、最後の一枚のお皿を手から滑らせてしまったのだ。

「あつ——!」

しまった。啓ちゃんに言っておいて自分で落とすとは。

慌てて落としたお皿に手を伸ばすけれど、届かない。それどころか、アタフタと身体を動かしたせいで、思い切り前のめりに転んでしまふ……!?

ああ、ごめん啓ちゃん。お皿、一枚無駄に——。

「おつと!」

なっちゃん。そう思っていたけど、現実はそうでなかった。

大きな腕が私の腰まわりをぎゅっと掴んでいるのが分かる。そして、お皿はというと、啓ちゃんの長い腕によって見事キャッチされていたのである。

つまり、今私は啓ちゃんに抱きかかえられている、というわけである。それも、こんな間近で。

「大丈夫か、秋穂？」

心配そうに啓ちゃんが顔を覗き込んでくる。つい視線を逸らしそうになってしまったけど、何も言わずくくと頷いた。

今日は、何だか凄い心臓に悪い日だ。どうしてこんなハプニングばっかり起きるんだろう。それも、こういう事ばかりの。

啓ちゃんは幼馴染だ。だから、普段からあまり意識はしていない方なのだけれど、今日は何故か、いつにもまして意識してしまう。それも、異性として。

なんでこんなにドキドキするんだろう。相手は昔からの幼馴染で、ずっと昔から知っている親友のはずなのに。

どうしてこんなに胸が痛いのだろう。私は一体、何という感情から逃げているんだろう。なんでこんなに……顔が真っ赤になるんだろう。

「良かった。本人が落としてたら駄目じゃないか。ほれ、皿。今度は気をつけてな」

「あ……うん」

啓ちゃんは、にっと笑って私にお皿を手渡してくる。それを水洗いして、さっと食器棚に入れた。

ふう、と大きく息を吐く。落ち着け、落ち着きなさい。何も意識することなんかない。ただ私は、啓ちゃんと御飯を食べて、ちよつとしたアクシデントがあっただけ。

何も変なことがあったわけじゃない。落ち着け、落ち着け……。

大きく息を吸って吐いたりする私に、啓ちゃんは最初は不思議そうな視線を向けていたけど、やがて興味をなくしたのか、蛇口で手を

何度か洗って、そのままリビングへと戻った。
そういえば、もう八時だ。時間が経つのは本当に早い。外はもう、
真っ黒な闇の世界に包まれていた。

玄関でいそいそと靴を履く私の後ろには啓ちゃんがいる。わざわざ
見送りに来てくれたのだ。

「それじゃ、啓ちゃんバイバ——んっ？」

なにやらポケットから振動が。何やら携帯がメールを受信したみたいだ。

誰からだろう。そう思いながら受信先を覗いて内容を確認すると……

……。
……。

ぞわっ、と背筋に寒気が走った。それと同時に、外で雷がゴロゴロ
と喧しい音を上げた。なんというタイミング。心臓が暴れ馬のよう
に跳ね上がった気がした。

それを聞いて後ろに居た啓ちゃんがおおっと声を出す。だけど私よ
り驚いてはいない。雷に反応しただけだった。

「わっ。結構今のは近かったな。まだまだ鳴り止みそうにな——」

「あ、あの、啓ちゃん！」

「んっ、どした？」

「……きよ、今日、啓ちゃんの家泊まっちゃ、ダメかな……？」

「……へっ？」

あまりに突然すぎる私の提案に、啓ちゃんはすつとんきょうな声を上げた。何と言うか、本気と書いてマジで驚いている様子だった。そりゃあ、まあ、そうだよな。いくら幼馴染といっても、誰も居ない家で二人で過ごすのは流石にね……。

でも、一人はもつと嫌だ。帰ったら一人だ。あのトラウマを一人で体感するのはもつと嫌だ。絶対に嫌だ。

「ちよ、ちよつと今さつき妹からメールが届いてね。ちようど啓ちゃんと同じような状況になっちゃったんだ。だ、だからさ、どうせお互い一人ぼっちなら、いつそのこと泊まっちゃってもいいかなって。あ、あははは……」

そうは言ってみたけれど、啓ちゃんは未だにポカンとした様子で私をずっと見ている。

「えつと、寝巻きは？」

「うつ。い、いったん取りに戻って……」

「それならそのまま家に居た方がいいじゃないのか？ わざわざ俺んちに泊まらなくてもいいと思うぞ？」

「た、確かにそうだけどさー……！」

言っていることが支離滅裂なのはわかってる。けど、「雷が怖い

ら一人は嫌だ」なんて、恥ずかしくて死んでも言えない！
だから……。

「お願い！ 今日だけでいいから泊まらせて！ 何も変なことはしないからー！」

顔の前で両手を合わせて、私は啓ちゃんにお願いした。いつの間にか必死になっていた自分にいつの間にか苦笑が漏れた。

啓ちゃんは困った様子で私を見ると、やれやれと言った顔でため息をついた。

「ま、まあ今日は色々とお世話になったから、別にいいけどさ。どうせ明日も休みだし。んで、親には――」

「やったー！ ありがと啓ちゃん！ あ、親にはちゃんと連絡入れるから大丈夫！ それじゃ、荷物取ってくるね！」

「あ、ちよつとまつ……最後まで話を――！」

啓ちゃんの制止を待たず、私は玄関を出て大降りの雨の中を駆け出した。もちろん、カッパを着用するのは忘れない。

雷が怖いってのもあるけど、それに――今日はもつと啓ちゃんと話したい。だから、今日一日だけ……二人でゆっくりしたい。

……ふつと冷静になって考えてみたけど。

親のいない家で、二人つきり。これって、結構ヤバイよね……？

二人しかいない家は本当に静かだ。これで外がうるさくなかったら、

本当に静寂の中で二人つきりなだけれど。

今、私は寝巻きに着替えて、啓ちゃんの部屋の、彼のベッドの上に寝転んでいる。先にお風呂を借りたので、今は啓ちゃんが入浴中である。

啓ちゃんがないので、試しにぶわつと彼の布団に顔を埋めてみた。ふわふわで温かい布団から、僅かに啓ちゃんの匂いがした。

自分の匂いには鈍感っていうけれど、私自身、自分がどんな匂いはなっているのか分からない。多分臭くは……ないよね？ ちゃんと身体洗ってるし。

啓ちゃんは……なんていうか、石鹸が好きなのかな？ 心地よい石鹸の香りを良く漂わせている。布団にも、その匂いは染み付いていた。

ごそごそと尺取虫のように移動して、私はベッドの下の空間になにが物が置いてあることに気づいた。見たところ、それは本みたいだが。

……おおおつ、これはもしかして、もしかすると……！ 途端にワクワクが襲ってきた。これは青少年にありがちな、エッチな本をベッドの下に隠しているってやつですかい？

啓ちゃんも男の子だねえ。とニヤニヤしながら、その本を拾い上げた。さあ、啓ちゃんの性癖ご対面——と、テンションが上がったのは束の間、それは直ぐに降下していった。

「月刊……猫通信？ 何コレ？」

想像ではナイスバディのお姉さんがその裸体を披露している表紙かと思ってたけど、現実には可愛い子猫がじつとこちらを見詰めている表紙だった。

表紙だけ挿げ替えてるのかな？ と思つてペラペラとページを捲つてみたけど、中身も本物だった。どれもこれも可愛い猫の写真が目

白押しで、エッチなお姉さんは誰一人出てこなかった。出たとしても、それは広告ページのランジェリー特集くらいなものだった。基本コレ、レディース雑誌なのね。

「なーんだ。つまんない。せつかくこれをネタにして啓ちゃんをいじろうかと思ってたのに……」

「何がつまらないって？」

「うひゃあっ！？ も、もう出てたの！？」

気づけば、私の横には啓ちゃんが立っていた。いつの間に戻ってきたんだろ。全然気配を感じなかった。

「あ、それ俺の雑誌じゃないか。秋穂も興味あるのか？」

「う、ううん。ちょっとベッドの下で拾ったからね。気になってみただけ」

「そっか。本棚にしまい忘れてたんだな。……そろそろ寝るか？ 姉貴の部屋を使っていいから」

「あ、うん。そうだね……でも」

ぼふっと布団に顔を埋めて、私は言った。

「もう少しお話しようよ。せつかくのお泊りなんだし」

それからというものの、学校での他愛ない話や、中学を卒業したら

どこの高校に行くのとか、そんな話題ばかりだった。

話に飽きたら二人でカードゲームをしたり、テレビゲームをしたり、またそれに飽きたら話に戻って……単調ではあるけど、それでも二人きりの有意義な時間は過ごせたと思う。

時刻はいつの間にか十一時をまわっていた。もう一時間経てば今日は終わり、明日がやってくる。一日というものは本当に早いね。二十四時間より、もう数時間は時間が欲しいと何度思っただろう。特にテスト前とかね。

啓ちゃんにおやすみと告げて、私は彼のお姉さん——綾音さんの部屋で寝る事にした。

ふかふかのベッドは相変わらずで、啓ちゃんと良く似た匂いが鼻についた。やっぱり姉弟なんだね。

「……ふう」

ベッドに転がって、俺はゆっくりと息をついた。秋穂におやすみと告げて、一時間くらい経過しただろうか。外からは雷と豪雨の喧しい音がいつまでも響き渡っている。

さっきの雷は大きかったな。結構近くに落ちたんだろうか。停電しなきゃいいんだけど。

それにしても、今日はいろんな事があったな。秋穂が水泳を教えてくれていきなり言い出して、今度は一緒に泊まって……。

泊めてって言い出したのは流石に驚いた。二人とも親がいない状況で、その……変なことが起きなきゃいいんだけど。まあ、俺が何かしない限り大丈夫なんだとは思うがな。

そう思っていた矢先、部屋のドアがキィ、と開いた。そこには、自

分の……というか、姉貴の枕を抱えてこっちを見ている秋穂の姿があった。

何故だか分からないけれど、すごく怯えている様子だった。

「け、啓ちゃん……」

「ど、どした秋穂？ 姉貴の部屋でなんか出たか？」

「そ、そんなんじゃないけどさ……」

もじもじと身体を動かす秋穂に少しドキツとする。幼馴染だけど、やっぱり秋穂は可愛いなって思うことが何度かある。

いつも変に俺をからかったり遊び道具にしたりするけれど、それを抜いても、やっぱり彼女はどこか魅力的だった。

秋穂は、枕に顔を埋めて、ぼそぼそと呟く。

「あ、あの。啓ちゃん。今日……一緒に……いや。と、となりで寝ても、いいかな……？」

そうきたか。いや、なんとなくは分かってたんだけど、どうしてだ。

「いや、さ、流石にそれはまずいんじゃないのかな……って思うんだが。俺も一応男だしさ、なんか間違いがあったら、その……ヤバイだろ？」

「……怖いの」

「へ？」

「雷、怖い。だから……お願い。一緒に寝て。一人じゃ……心細

いの」

落ち着きのない秋穂は、ちょうどいいタイミングで聞こえた雷の音に肩を跳ね上げた。ガチガチと聞こえる歯の音は彼女のものか。本当にそれは、雷という存在に恐怖している証拠だった。何か雷でトラウマを持っているのだろうか。この怯えようは異常だ。そして、見ていて……すごく可哀相だ。

もう、四の五の言ってられないかもしれない。こうして、彼女は俺を頼ってここまで来たんだ。こんな様子を見て帰れだなんざ言えるわけがない。

「……ほら。こっち来いよ。そこに居てもしょうがないだろ？」

そう言っただけで彼女に手招くと、秋穂はこくと頷いて俺のベッドに入ってきた。俺の心臓がすごい速さで鼓動しているのが、彼女には聞こえているのだろうか。

俺は何も言わず、部屋の電気を消して、秋穂に背を向けるように寝た。

小さな呼吸が聞こえるたびに、今、この場は一人じゃない。秋穂がいるんだと実感して……なんだか、すごい意識してしまう。

「なあ」

「……なに？」

「雷、トラウマなのか？」

「……うん。小さい頃にね、雷が凄く近くで落ちてきたことがあって、それが未だに忘れられなくてね。笑っちゃうよね、十五にも

なっただよ？ 雷が怖いだなんてさ」

「……普段は、どうしてたんだ？」

「……う。あんまり言いたくはなかったんだけどね。そういう時は大きなクマのぬいぐるみを抱きしめて寝てたんだ。少しでも誰かに守ってもらいたかったから、誰かのぬくもりを感じたかったから」

外から轟音が響いた。また雷か。それを聴いた秋穂は俺の腰に手を回して、ぎゅっとしがみついて来た。温かく、それでいて柔らかい彼女の身体がピタリと密着している。

更に心臓が高鳴り始めてきたが、彼女の身体が震えているのを感じて、少しだけ落ち着いてきた。故意じゃない。彼女は本気で怖いんだ。

「……大丈夫だよ。今だけ、俺がお前を守ってやるから。雷なんて怖くねえよ。だから……今日は落ち着いて、安心して寝ればいいさ」

「……うん」

すっと、秋穂は腕の力を弱めた。震えも幾許かおさまったようだ。トラウマとはまた、秋穂も厄介なものを抱え込んでるな。それでも小さい頃に起きた出来事だから、その時の恐怖も半端なかったんだろ。

いつまでも、今でも残っているくらいだ。それは相当本人にとってショックだったんだろうと思う。

首を少しだけ後ろに振り向かせて、俺は秋穂に言ってやった。

「おやすみ、秋穂」

「……うん。おやすみ、啓ちゃん」

彼女の瞳が閉じるのを確認して、俺も目を瞑った。

今日の疲れもあったせいかな、直ぐに意識は闇の中へと落ちていった。

小鳥のさえずりが耳を過ぎる朝の日。あれからどれくらいの時間が経過しただろうか。気づけば私の意識も直ぐに落ちていた。

啓ちゃんの大きな背中を目の当たりにして、ふっと気づく。ああ、そうか。昨晚、無理を言って啓ちゃんの部屋で寝させてもらったんだっけ。

ずっと抱きしめていた腕をするりと外し、むくりと起き上がる。外から差し込む日差しが眩しい。あれだけうるさかった豪雨や雷も過ぎ去って、今では快晴な空が広がっていた。

啓ちゃんかというと、すうすうと寝息を立てて眠っている。時計を見たら、まだ午前六時だった。少し早く起き過ぎちゃったかな。

……啓ちゃん。

私は不意に昨日言っていた、彼の言葉を思い出した。

“俺がお前を守ってやるから”

そう言われて、すごく嬉しかった。胸がすっと軽くなって、落ち着いた気持ちになった。

たとえそれがその場限りの約束だったとしても、こんなにも胸がドキドキして、切なくなったのは初めてだった。

愛しい。彼のことが、愛しい。そんな感情が生まれたのも初めてだった。幼馴染としてじゃなく、異性として……彼のことが、愛しい。

「……ちよつとだけなら、いいよね？」

そつと、彼の肩に手を乗せて、彼に身を寄せる。啓ちゃんの綺麗な頬が艶やかに光って、思わず心臓が高鳴る。

——ありがとうの気持ちを込めて。心臓がうるさく鳴り響くのを無視して、私は啓ちゃんの頬に唇を重ねようとして——。

「んっ……んんっ……」

「——えっ？」

——それが出来なかった。

寝返りを打った啓ちゃんはくると後ろを振り返ったので、頬に唇を重ねることができなかったのだ。ただ、その代わりに……。

振り向いた啓ちゃんの唇へ、私の唇が重なった。

頬にしようと思っていたキスは、誤って啓ちゃんの唇を奪ってしまったのだ。

「——ッ!？」

どれくらいの時間、唇を重ねあっていただろう。バツと仰け反るように私は啓ちゃんから離れた。

故意じゃないとはいえ、啓ちゃんの唇に自分の唇を重ねてしまった。それも、こんな、こんな——!

カア、つと顔が真っ赤になるのが良く分かった。頭が熱い。何も考えられない。火照った身体が微力の電気を流しているようでゾクゾクする。

……今、啓ちゃんと私……えっ?

キス、したんだよね……? それも、ファースト、キスを……!?!? ぼふん、と布団に顔を埋めて、私は高鳴る鼓動を必死に押さえつけ

ようとした。

けれどそれは無理だった。バクバクと鳴り響くそれは一向におさまる気配がない。

寝よう。とりあえず寝よう。二度寝したら少しは落ち着くかもしれない。もしかすると、夢だったのかなって思えるかもしれない。

ぎゅっと目を瞑って、私は羊を数えながらもう一度眠りについた。

……けれど、唇に感じる、僅かに感じる彼の柔らかい唇の感触がどうしても忘れることが出来ず、結局、いつまでも眠れずに、彼が起きるのを待っていたのでした。

「それじゃ、家に戻るんだな」

「う、うん。そだね」

「……なんか秋穂、顔が赤いぞ？ 熱でもあるのか？」

「そ、そんなことないよ！」

誤ってあなたにキスをしたなんて死んでもいいない。言ったって気まずくなるだけだし。

玄関のドアを開けて、くるりと振り返る。啓ちゃんに笑顔向けながら。

「ねえ、啓ちゃん」

「ん？」

「啓ちゃんってさ。高校はどこに通うの？」

「高校？ 俺は……桜ヶ丘学園だな。近いし、頑張れば今の学力でも行けるから」

「桜ヶ丘、かあ……ふふっ」

「どした？ なんか面白いかな？」

「んーん、なんでもない♪ それじゃ啓ちゃん、またねっ！」

大きく手を振って、私は啓ちゃんの家を後にした。

昨日は色々あった。プールで練習して、啓ちゃんの家で料理をして、そして泊まって。

たくさん、たくさんあった。ドキドキしたことや、ワクワクしたことともあった。

でも、それ以上に――。

「……………」

私は、啓ちゃんのことを大好きになった。昔から好きだったけれど、今は、『大好き』。

幼馴染としても、異性としても、大好き。誰よりも……大好き。家に帰ったら、お母さんとお父さんにちゃんとのおお。進路のことと、好きな人が出来たこと。

きつと、二人とも納得してくれるよね。雪奈だって、応援してくれるよね。だって、やっと自分の気持ちに正直になれたんだから。

「……空が、青いや」

晴れ晴れとして、清々しい。昨日の豪雨や雷はまるで嘘のように、

空は澄んだ青空が広がっている。

胸いっぱい空気を吸い込んで、ゆっくり吐く。夏場だけど、蒸し暑くない朝の空気が気持ちいい。今日は本当に過ごしやすいや。

一歩、踏み出して、そのまま駆け出す。吹きぬける風が頬に当たって涼しい。もっと、もっと感じていたい。この風を、この身で感じていたい。

——そして吹き抜ける風の中で、私は誰にも聞こえない声で、ぽつりと呟いた。自分の、素直な想いを……そつと。

“ 大好きだよ、啓ちゃん ”

【啓太と秋穂 完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6743k/>

猫又のサクラ番外編【啓太と秋穂】

2010年11月4日02時51分発行